

ぼうさい通信 40号



毎月16日は「防災教育啓発の日」

令和3年1月15日発行
熊本県立湧心館高等学校

阪神淡路大震災と足元に潜む活断層について学びましょう

いきなり「ドドン」と、一瞬のうちに我が家は2階が下を押し潰して全壊。1階で布団を敷いて休んでいた私たち夫婦は、生き埋めになってしまった。コタツと畳の間のわずかな空洞ができて、顔の上に押入れのふすまが覆いかぶさったおかげで、窒息せずに済んだが動けない。管が外れたのか、ガスの臭いが漂い、爆発で吹っ飛ぶのではないかと震えが止まらない。「体力が消耗するので、声を出すな」と夫に言われたが、一生懸命に叫び続けた。しかし、パトカーや救急車、消防車にヘリコプター、人の声まで、何でもよく聞こえるのに、なぜかこちらの声は全く外に届かない。それからは「命さえあればいい」と、長く苦しい時間をひたすら耐えた。

極限状態ながらも、「子どもたちだけは助かってほしい」と話し合っていた時、自力で脱出できた息子の声が外から聞こえた。主人がイチかバチかでコタツを蹴ってみると、息子がその音に気づき、近所の方々も飛び出してきてくれた。大地震から7時間後、奇跡的に助けていただいた。(神戸市東灘区 女性)

「安全神話の崩壊」

1995(平成7)年1月17日午前5時46分、淡路島北部から神戸市、西宮市にかけて激しい揺れが襲いました。夜明け前の自宅で安心して眠っているなか、いきなりすさまじいゆれに襲われる状況を想像してみてください。数



十万人の人々が身構える間もないまま、転倒した家具や倒壊した建物の下敷きになって身動きができなくなり、多くの人が命を落としました。地震による直接の犠牲者は5512人で、そのうち約9割は圧死や打撲で亡くなり、その9割は即死だったとされます。人口が集中する大都市を地震が直撃する恐ろしさに、日本中が衝撃を受けました。地元では「関西には地震はこない」と信じられていましたし(歴史上では誤りで、数度の大地震が起きています)、耐震性の進んだ都市が一瞬にして壊滅した光景を目の当たりにした人々は、「安全神話の崩壊」という思いを強くしました。

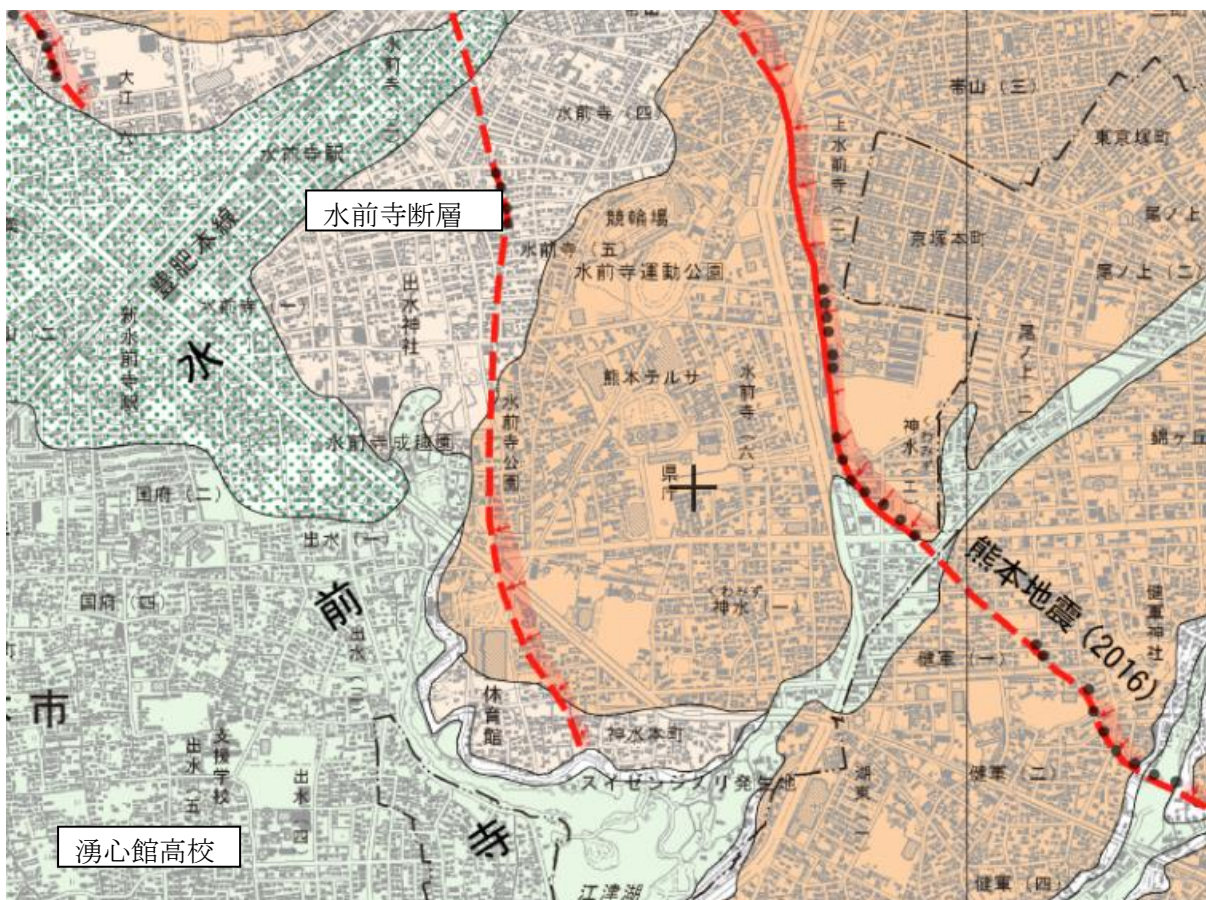
活断層のはなし

地震には主に2つの種類があります。一つは海洋プレートが大陸プレートに沈み込む海溝付近で起きる「海溝型地震」、もう一つは私達が生活する陸や沿岸部の真下の浅いところで起きる「直下型地震」です。さきの阪神淡路大震災はこの「直下型地震」で、熊本地震もこれにあたります。この地震を引き起こすものは「活断層」というものです。地球の表面を覆うプレートを粘土板に例えれば、「活断層」は粘土に入ったヒビです。曲げられた粘土にはいるヒビを想像してください。日本列島は、4つのプレートがぶつかり合い、ねじ曲げられ、下に潜り込んでできた、無数のヒビ(活断層)の上にある島なのです。「大都市直下に「活断層」がある……」、これは決して偶然ではありません。私たちはおもに平野や盆地に町をつくります。田畑となる平地や、物資を運ぶ舟が行き来できる河川など、さまざまな恵みがあるためです。しかし、このような平地や盆地、河川の形成に「活断層」が関わっている場所が多くあります。大阪平野や濃尾平野などが代表例ですが、熊本平野もその例です。

活断層地図

←「国土地理院 活断層図」で検索

活断層の場所は約2000が確認されていますが、調査によりどんどん新しいものが見つかっています。熊本地震後の調査で本県でも新しい活断層が確認されています。本校の近くにも活断層が確認されており、私たちは常にそのことを頭に置いておかなければなりません。



阪神淡路大震災後、建物などの構造物の耐震基準も見直され、地震に強い国土に生まれ変わりつつあります。私たちも「減災」の意識を持つようになりました。「まさか自分が」ではなく「いつ起きてもおかしくない」という意識を持ち、状況を判断し身を守る「自助」の習慣を身に着けることが重要です。 【文責 通信制防災担当】